

# **“The Hilltop Hotel”, Designed by W.M.Vories (2)**

## **—Impressions from Various Writers—**

**NAKAMORI Yasuyuki**  
**YAMAKAWA Ayumu**

### Summary

W.M.vories (1880-1964) designed many houses, churchs, school bulldings and Others. Many people feel that they are attractive and comfotable. However, there are no evidence explaining why they are attractive and comfortable.

But exceptionally, many writers told the impression about the Hilltop Hotel.In this research, we gathered their comments about the Hilltop Hotel as much as possible. And we analyzed the meaning of that comment.

#### Hilltop Hotel:

The Hilltop hotel was not originally constructed as a hotel. It was built by Keitaro Sato in 1937 as “Sato shinko Seikatsukan” aiming at improving the Japanese life style.

# ヴォーリス建築：山の上ホテル (2)

## —作家の証言が意味するもの—

中 森 康 之  
山 川 歩 夢  
(本学大学院生)

### 1. はじめに

前稿<sup>1</sup>では、作家の証言を列挙し、山の上ホテルの歴史を概観した。本稿では引き続き、いくつかの視点から山の上ホテルについて考えてみたい。

### 2. 生活改善運動・住宅改良運動

明治維新以後急速に進められてきた日本の近代化は、大正期になると一般家庭にも広く浸透するようになる。その中で日本人の生活を改善しようという運動、すなわち生活改善運動がおこる。この運動に関わった多くはキリスト教関係者であったが、生活が文化的なものに改善されるためには、当然のことながら、その「場」である住宅がそれにふさわしいものに改良されなければならない。そこで生活改善運動は、住宅改良運動と連動するかたちで展開することになる。例えば橋口信助は次のように述べている<sup>2</sup>。

住宅は生活を盛る器である。器の如何によつて生活は如何様にも変化し得られるのである。従つて我々は、先づ自己の生活を改善せんとならば其の器たる住宅を改良しなければならぬのである。

また西村伊作も次のように述べている<sup>3</sup>。

我々は事情の許す限り、最も自分のために善い家、最も自分の理想に近い家を求むることに努力し、……自分にもつとも適し、自分の生活を最も楽しく幸福にさす家を作ることを考へねばなりません。(省略引用者。以下同じ)

さて、生活改善運動・住宅改良運動は、主に博覧会・展覧会、会の結成、雑誌・書籍の発行という形で行われた(表1)。これを見ると、運動は、初期は羽仁もと子や三角錫子といった女子

教育者たちが口火を切り、すぐに橋口信助や佐野利器等の建築家がそれに続いたことがわかる。さらにはヴォーリズとも関係が深かった森本厚吉も積極的に活動した。また内田青蔵によると、博覧会・展覧会への出品物は、部分的な改良案から住宅全体の改良へと変化したという<sup>4</sup>。

この運動による改善の典型例は、客間中心（接客本位）から居間中心（家族本位）へ、床座から椅子座へ、蹲踞式台所から立動式台所への改善である。ヴォーリズもこれらを重視していたことは、例えば次のような文章からも分かる<sup>5</sup>。

日本の家に入るなればどうでせう。一番立派な設備はどこにありますか。まづ大方の家がお座敷、客間です。お客さんに見せるのが第一で、「まあお上がりなさい」、といふので無理にも引張りあげて座敷を見せる。「これは立派です」、と吃驚すれば、主人も奥様も大満足で、子供なんかどうでもいゝやうな有様。綺麗なお庭をつくる、そしてそこに立派な泉水までできて、橋が架けてあるといふやうな贅沢加減。どうでせう、どうせその泉水にはいつも水が流れてをる訳ではないから、まづ橋なんか不必要です。その橋に何千圓、燈籠に何百圓といふやうな沢山のお金がかけてある。……客間は額も掲げられてをり、花も活けられてをり、掃除も行届いて、お庭に面したところに、心地よく設備してあるに拘わらず、家族の住む居間の方は、極く粗末な、畳のぼろぼろになつた、光線も入らぬ北側にあつて、その暗い汚い所に、まるで鼠みたいな生活をしてをる。既にこれすらが情ない。

このようにヴォーリスも客間中心（接客本位）の旧来の日本家屋に批判的であった。この文章の後、「畳の問題」を取り上げ、ベッドの良さを強調し、さらに話題は台所へと展開する。

それならばまづどういふ所から始めるか。普通の人には、立派な座敷、上等の客間、なによりも正面を立派にする、と思ふかも知らんが私はそれと反対私は初めに台所をやる、台所がう

表 1 生活改善運動・住宅改良運動の動向

年	名称	主催	主な関係者	目的	特徴
1908 (明治41)	婦人之友社設立		羽仁もと子 (教育者・思想家)	女性をとりまく諸問題を幅広い視点から考える	雑誌『婦人之友』の発行
1915 (大正4)	家庭博覧会	国民新聞社		時代に適合する家庭生活をありのままの実際を示す 和洋の混在した生活を整理	住宅の部分を対象とする改良案中心 女子教育家等の作品が多い
1916 (大正5)	住宅改良会設立		橋口信助 (あめりか屋) 三角錫子 (女子教育家)	二重生活の廃止 和風住宅の洋風化により合理的な住まいに改良	住宅専門雑誌『住宅』の発行 住まいに関する設計競技の実施
1919 (大正8)	生活改善展覧会	文部省		生活改善の普及 生活改善の方向を示す	住宅全体を扱った出品が多い 建築教育関係者・女子教育者による出品
1920 (大正9)	生活改善同盟会設立 (住宅改善調査会)		佐野利器 (建築家・構造学者) 田辺淳吉 (建築家)	生活改善の啓蒙活動を継続的に指導	改善方針・改善項目の検討、発表 講演会・講習会・展覧会の実施
	文化生活研究会設立		森本厚吉 (生活研究家) 吉野作蔵 (政治学者)	科学的に生活を改善 誰もが文化的な生活を営める方策を啓もうする	『吾家の設計』W.M.ヴォーリス (1923) 『明星の家』西村伊作 (1923) 出版
1922 (大正11)	平和記念東京博覧会 (文化村)	東京府		産業の状況を展示し、将来の発展に資す 「二重生活の弊」を取り除いた実際の住宅の展示	14棟の実物住宅の展示 建築関係者による出品
	住宅改造博覧会	日本建築協会		現代の国民生活に適應した中流住宅の展示	27棟の実物住宅の展示 街全体としての一体的な計画
	文化普及会設立		森本厚吉 (生活研究家)	中流階級の生活改善の啓蒙	『文化生活研究』『文化生活』刊行 合理的・経済性に基づいた観点 文化アパートメント (1926年)
			佐藤功一 (建築家)		
			W.M.ヴォーリス		
1924 (大正13)	同潤会設立		佐野利器 (建築家・構造学者) 内田祥三 (建築学者)	関東大震災を受け住宅復興を目的として政府が設立	耐震耐火 (構造面) 生活様式の選択、近代的な設備を重視

上表以外にも、「改良住宅図案懸賞競技設計」（1919年、日本建築協会）、報知新聞や大阪朝日新聞社や住宅改良会主催のコンペ（1915～1919）、登上源一創設の「住宅改造会」（1920年）などがある。

（表1作成：池田翔奈）

まくできたら、その家の価値が上がる。台所が拙いなら、値打は半分以上なくなる。なぜならば、台所は吾々の生命懸けの場所です。吾々の生きて行くための大事な食物をつくる所です。自分は、住宅を設計するときには、台所から設計する、なぜなら、台所こそ、家族の健康と命を守るための食事を作る「生命懸けの場所」だからだ。そうヴォーリズは述べているのである。そして当時、その台所で多くの時間を過ごすのは女性であった。

このように、生活改善運動・住宅改良運動において、文化的な生活、特に家庭生活の要である女性の生活改善が唱えられ、建築家たちもまたその声をうけ、それを組み込んだ新たな理想的な住宅を提案したのであった。逆に言えば、当時の建築家たちは、住宅の改良だけでなく、生活自体の改善をも視野に入れていたということである。

### 3. W.M. ヴォーリズの思想

以上のような時代状況の中、前稿で述べたように、山の上ホテルは、1937年（昭和12）実業家佐藤慶太郎によって、佐藤新興生活館として建設された。設計を託されたのがヴォーリズである。

本節では、前稿で述べた佐藤新興生活館建設に至る佐藤慶太郎の思想に共振するヴォーリズの思想をごく簡単に見ておきたい。

キリスト教伝道を目的に来日したヴォーリズが理想としていた生活は、いうまでもなくキリスト教的＝文化的な生活である。それは神に与えられた生命を大切に、愛の精神によって支えられたものである。そのような生活においては、健康に暮らすことがとても大切なことなのである。

そのように考えるヴォーリズにとって、住宅は、その中で過ごす家族、とりわけ女性と子どもが、健康に暮らせるものでなければならなかったのは当然であった。『吾家の設計』には、先に引用した台所の重要性とともに、子ども部屋についても詳しく述べられている。また『吾家の生活』<sup>6</sup>ではさらに踏み込んで、次のように女性を讃美し、婦人教育の必要を説いている。

其の故に、私は社会の将来は母としての婦人の手にあるといふのである。

而して、そう考へたからといつて、前途が暗くなる訳じやない。反って輝きと希望が生ずる。何とならば、善い母は常に此の世界を救ふために非常な善い働きをなしてゐるからである。社会の問題を紛糾させ、政界に波瀾を起さしめるのは常に男子である。善くない法律を作り上げて、善良の風俗をみだすものも男子である。日常食物に気をつけず、其の習慣がふしだらになり、礼儀作法も弁へず、唯物質主義にかられて常道を逸し、神をわすれ、精神生活の事も打捨て、遂には人類社会を害し、自己及び隣人の生活までも脅かす、といふのが我々男子のやり方である。

其の時に当り、精神界の一角に一大指導者が現れ、政治界には大政治家、学界には憂世の士等が出て、警世の叫びを挙げて、社会の破滅を救ふのである。彼何者ぞ？ 真理と美の幻を見、信仰の目を以て、神の国の理想を求めた偉い、賢い母たる方が、神より使はされたる預言者として世に出すために育て上げた子供である。

凡ての母はかくありたい。こういふ理想に生きて欲しいと思ふ。さらば世の多くの悩まし

い問題も解決される事と思ふ。婦人教育に、男子教育にもまして緊要なる理由はこゝにある。

（下線引用者）

佐藤慶太郎がこの文章を読んだかどうかは定かではないが、佐藤慶太郎がいた環境から考えて、佐藤はヴォーリズのこのような考えは十分に知っていたと考えてよい。そして何より、お茶の水には、ヴォーリズが設計した、主婦之友社（1925年（大正14）竣工）、お茶の水文化アパートメント（同）が既に存在していたのである。

#### 4. 山の上ホテル ― ハード面

以上、佐藤新興生活館が建設された時代状況、その中にいた佐藤慶太郎（前稿）とヴォーリズの住宅改良と女子教育に対する考え方を見てきた。次に、山の上ホテルについて、ハード面とソフト面の両面から考えてみたい。

まずはハード面であるが、佐藤新興生活館の建築図面は、『ヴォーリズ建築図面集』（一粒社ヴォーリズ建築事務所編、山形政昭監修・解説、創元社、2017年8月）に掲載されている。またその建築的特徴の分析も多くなされている<sup>7</sup>ので、ここでは省略に従うことにして、改修のことなど、その周辺事情を見ることにしたい。

##### 4. 1. 神田駿河台界限

伊藤真人によると<sup>8</sup>神田駿河台は、昔は「神田山」と呼ばれる高峻な山だった。1603年、将軍・徳川家康が諸侯に命令を出し、神田山の土を東南の海洲34四町へ埋め立てた。その際に、浜町、八丁堀、銀座、日比谷などの町が生まれた。駿河台は千代田区の中で最も地盤が高く、佐藤新興生活館はその高台の頂上に立っていた。昭和10年には、周辺は一面原っぱであったという。夏には小学生たちが虫取りに駿河台の坂を駆けて来たり、南側の靖国通りに建て並ぶ古本屋を訪れる客たちが、休憩しながら丘の上の佐藤新興生活館を眺めていた。当時、佐藤新興生活館は駿河台のランドマークになっていた。

『山の上ホテルの流儀』によると、山の上ホテル創業当時には、出版社が数多く存在し、直木賞や芥川賞を受賞した作家の為にホテルの予約を行い、1週間から2週間又は1ヶ月の間作家をホテルに宿泊させた。締め切りに間に合わない場合は、作家をホテルに閉じ込めて原稿を書かせる、いわゆる「カンヅメ」にしていた。そのため、本館の前には駐車スペースが4台分設けられており、常にハイヤーが停まっていた。ハイヤーは全て新聞社や出版社のものであり、作家の原稿が仕上がると、ページボーイが呼ばれ、作家の部屋に原稿を取りに行き、待機している出版社の編集者たちに原稿を渡していた。その繰り返して、ハイヤーは入れ替わり、立ち替わりであったと言う。

##### 4. 2. 創業時の山の上ホテル

『山の上ホテルの流儀』によると、1954年（昭和29年）1月20日、東京都千代田区神田駿河

台に「文化人のホテル」というキャッチコピーで山の上ホテルは開業した。政府の登録許可を取得したのは同年10月8日であり、1957年（昭和32年）にホテル協会に加入した。当時の日本にはホテルが57軒しか建てられておらず、山の上ホテルは57番目となった。

ホテル協会の加入前、開業の必要条件を満たすため改装された。基準を満たすため10部屋以上に浴槽やシャワー設備を取り付け、全室には浴室を設けなかった。そのため、宿泊客がチェックインした際は、まず入浴時間を把握し、宿泊客が使用する度従業員が清掃していた。さらに、ロビーの面積も拡大した。帝国ホテルの犬山一郎の協力を経て、ホテル基準を満たしているのか確認作業を行ったと言う。

創業当時は、客室が47室、社員は僅か7人であった。その後、1970年（昭和15年）に別館が建設され、1980年（昭和55年）には本館を改修することが決定した。

#### 4. 3. 山の上ホテル改修工事

創業からしばらく経った1970年代、山の上ホテルは宿泊客や、近隣の人々に次第に親しまれていった。しかし、もともとホテルとして設計されたわけではなかったこともあり、近代的なホテルとは大分落差が目立つようになってきた。そこで吉田俊男が何人かの建築関係者に相談したが、ただ一人を除いて、取り壊して新築という回答しか得られなかった。その一人とは、アトリエ・アイの阿井和男だった。「この建物は、まだ保つ、設備やスペースの不足は増築で補える、ヴォーリズの作品だったら、絶対に残すべきだ」<sup>9</sup>と主張したのである。阿井はヴォーリズの「崇拜者」という訳ではなかったが、山の上ホテルに見られるようなスケルトンが目立つ建物は、社会や歴史の中に残していくべきだと考えたのである。吉田はアトリエ・アイに任せた。

アトリエ・アイの計画は、SDG 構造設計集団の所長・渡辺邦夫、宇治田総合建築研究所の所長・宇治田譲、松下電器産業の手塚政仁の協力で進められたが、改修は困難を極めた。山の上ホテルの構造が、接収時の軍の強引な改造により改修が難しくなっていたことや、駐車場を設けるスペースが足りず、スケルトンに影響を及ぼしてしまう可能性があるなど、難問が山積していたからである。だが、「ありきたりのことをしっかり積み重ねてゆくのだという姿勢は、ヴォーリズもまた持っていた」、「インテリアについても家具とか照明家具に頭を働かしてゆけば「近代ホテル」として十分に再生できる、取り壊すなんて勿体ない建築」だと信じていた阿井は、改修をやり遂げた。阿井は、「われわれのような小人数のグループでも、応援を頼み、連合を組めば、大きな仕事もできる。これは、今回の仕事のひとつの側面でした」と語る一方で、「それにしてもしんどい仕事でした」、「既存の仕上げを剥がしてはプランや収まりの図面を描いてゆくのですから（略）。現場の振動と騒音と埃の中での「労働」に耐えられないと、保存運動なんかできません」とも述べている。

もちろん吉田俊男も積極的に関わった。渡辺邦夫は、「吉田さんはまさに英国紳士の代表のような方で、温厚だが自分がこの町とこのホテルをいかに愛しているか、しかし近代的なホテルとはいえない設備上の欠陥、パブリックスペースがいかに不足しているか、ホテル利用客への十分なサービスをどうしたらできるか、などを話されていた」と述べている<sup>10</sup>。

こうして、1980年4月、山の上ホテル本館は、吉田が理想とする極上のサービスが行き届き、宿泊客が満足して過ごすにふさわしい建物として、阿井や吉田やその他多くの人たちの志によって、見事に再生したのであった。

伊藤真人は先の引用と同じところで、この改修に関して、次のように述べている。

一般に構造物は数100年の寿命があると思われるが、社会的変化によって構造物の寿命よりはるかに短い年月で取り壊されてしまう。構造物はいったんでき上がってしまうとその土地に固定化され、その構造物がその土地で機能しなくなればもはやクズ山でしかあり得なくなる。しかしそれは構造物の側に責任があるのではなく、それを使う人間の側に責任があるはずである。私たちが構造物をより有効に利用してゆくには、その時代の技術レベルに合わせた構造物の「蘇生」の倫理を考えてゆく必要がある。

吉田や阿井は、その「人間の側の責任」をしっかりと果たしたのである。

#### 4. 「旅籠」のような小さなホテル

いま思うに、社長の理想は、ヨーロッパの旅籠にあったのではないか。(略)ヨーロッパの下宿宿<sup>やど</sup>のような小さなホテルの部屋にバスルームがないという。現在、山の上ホテルは改修されて、各室にバスルームがある。そうして、旅籠の気持ちの暖かさだけが昔通りに残ったのである。

山口瞳がこう述べているように<sup>11</sup>、吉田が理想としたのは「小さなホテル」だった。しかしそれは単なるサイズの話ではなく、常盤新平が「山の上ホテルの電話交換の女性は常連客であれば「××様ですね」と声を聞いただけで言いあてる。これも吉田俊男の言う「小さなホテル」なればこそだ<sup>12</sup>と述べているように、「小さなホテル」がもつサービスや雰囲気であった。常盤は、ニューヨークにあったアルゴンクインホテルを定宿にしていた日本のビジネスマンが、「アルゴンクインはニューヨークの山の上ホテルだよ」、「なにしろサービスがいい、食事もうまいし、ブルー・バーという酒場がいい」と語っていたというエピソードを紹介している<sup>13</sup>。

また、池波正太郎が「掃除を担当する婦人たちがまでが気を配ってくれる」<sup>14</sup>といい、ホテル内に案内板を設置せず、常に従業員が気を配っているというのも吉田がめざした「小さなホテル」の「質」であった。さらに、各部屋にそれぞれ異なる質感を持たせていたこともまた、同様である。地下レストランに、豊郷小学校の階段の手すりにヴォーリズが設置したウサギとカメの置物と同じものを設置したのは、吉田のヴォーリズ精神に対する共感の表れだった<sup>15</sup>。

ところでこのように、佐藤慶太郎とヴォーリズの精神をよく理解し、自らも自分の理想を実現しようとした吉田俊男とは一体どのような人物だったのか。また彼に育てられた山の上ホテルの従業員たちは、彼から何を受け継ぎ、何が山の上ホテルを山の上ホテルたらしめてきたのだろうか。それをソフト面から見てみたい。

## 5. 山の上ホテル — ソフト面

山の上ホテルの魅力は、建物自体が静かで落ち着くというだけではない。そこには、社長である吉田俊男やホテル従業員たちの心遣いと、洗練された接客サービスが大きく関わっていた。

山の上ホテル創業者である吉田俊男は、建物に込められた佐藤慶太郎の思想、設計者ヴォーリズの思想、それによって実現した山の上ホテルという建物の本質をよく知っていた。吉田は、それらが最も活かされ、それらに最も相応しいホテルとして、山の上ホテルを誕生させたのである。そのために吉田が徹底したのが、従業員教育であり、彼らによるサービスであった。

前稿であげた作家たちを満足させたサービスとは一体どのようなものだったのか。『山の上ホテル物語』『山の上ホテルの流儀』等をもとに見てみよう。

### 5. 1. 吉田俊男

佐藤新興生活館は、戦後の一時期、GHQ に接収されていたが、その解除をきっかけに佐藤家は、親交が深い国文学者である吉田弥平の息子、吉田俊男に建物を貸与することにした。吉田俊男は、佐藤新興生活館として建設された建物を借り入れる形で、ホテル業を開始したのである。

吉田は 1913 年（大正 2 年）11 月 11 日に、国文学者の吉田弥平と、志づ子の次男として東京で出生した。1937 年（昭和 12 年）に東京商大卒業後、旭硝子に勤め、16 年勤務した後昭和 29 年に山の上ホテルを設立した。

吉田の人柄の評価は非常に高かった。「言うことを聞かない困った社長」「わがままで変わった、頭のいいとても厳しい社長」と従業員に言われる一方、「社長のことを従業員がこんなように言うのは、お互いに親近感があるからだと僕は理解していた」<sup>16</sup>と森裕治が述べているように、従業員たちは、厳しいながらも吉田を認めていたのである。

従業員たちは、吉田との関係を親子のように思っていたという。また吉田の方も、従業員の結婚式で、従業員を「うちの子」とよんでおり、お互いの信頼関係が深かったことが伺える。

吉田は、従業員がミスをしたときは本気で叱り、欠落したサービスを行わせないように徹底的に指導していたという。それが従業員にもよく受け継がれたことは、作家たちが、従業員やそのサービスを高く評価していたことが証明している。

だが、従業員は決して吉田俊男のイエスマンではなかった。秋山祐介は、「でも、間違っただけを社長は言うこともあるんですね。そういうときは、私は冷たくそっぽを向いた。社員のなかで物怖じしないで、ものを言うことで驚かれるんですが、それまでいろいろとぶつかってききましたから、わかってくるんですね」<sup>17</sup>と述べている。

また、グリルを担当していた井合幸治が、「僕は社長よりもこのホテルを愛していると自負していたんです。「これは誰のもんだい？」というのが社長の口癖でした。大半の社員は「社長のものです」と言っていました。僕は「社長のものです。でも、三階から上はおれのもんだ」って社長と張り合っていたわけです。気持ちではそうでした。社長にいっさいケチをつけられない仕

事をしたかった。」<sup>18</sup>と述べていることから分かるように、従業員たちも、山の上ホテルを愛し、そのサービスに誇りをもっていたのである。吉田と従業員たちの一致した志が、山の上ホテルのサービスを心地よいものにし、ホテルの内部空間の質を極上のものにしたのであった。

もちろん吉田は従業員だけでなく、作家たちにも評判がよかった。山口瞳は、「私は、そもそもが町なかの小さなホテルが大好きなのだが、こんな山の上ホテルのようなホテルが現代に残っているのは奇蹟のように思われて仕方がない。すべては社長の吉田俊男さんの御人柄のせいだと思っている。」<sup>19</sup>と述べており、吉田が亡くなった際も、追悼文として「山の上ホテルの社長の吉田俊男さんが亡くなったのは痛恨事である。吉田さんに私の絵を貰っていただくというのが私の願いのひとつであったが、その絵を差し上げて吉田さんが車椅子でもって飾る位置を指定したのが社長の最後の仕事になったと聞いている。吉田さんは私の尊敬する人の一人である。山の上ホテルは駿河台下のほうから行くと急な坂を登ることになるが、大雪が降ると吉田さんは社員に命じて徹夜で雪掻きをさせたそうだ。むろん、客に万一のことがあってはいけないという配慮からだ。私は、この坂を吉田坂と命名してもらいたいと本気で願っている。」<sup>20</sup>と述べている。そして興味深いことに、「吉田さんと気安そうに言うが、お目にかかったのは四度か五度で、いつでも、握手して、お互いの目を凝視あって笑うだけで終わっていた。言葉をかわすことはほとんどなかった。それだけで思いが通じているような気がした」<sup>21</sup>とも述べている。

吉田は一般的なホテルの枠を超えた、徹底したサービスを目指しており、ルームサービスに力を入れていた。時間が不規則な作家には、レストランで食事をさせるのではなく、吉田自ら手作りの料理を差し入れるようにしていた。また従業員に対して、作家たちがレストランへ時間外に利用できるように開けておくことを指示していた。ただ、作家だからといって過剰なサービスはしないようにと、すべての宿泊客は平等であるということ曲げなかった。ルームサービスは食事のサービスだけでなく、宿泊客が設備の不備を訴えると、その場で吉田が従業員に新しいものを買うように設備費を与え、即座に対応していた。また、掃除に関して非常に徹底しており、スイートルーム1部屋を丸2時間かけて掃除する程であった。それは宿泊客が靴のまま部屋に入るのをためらうほどであり、吉田は「ホテルの原点は掃除だ」と従業員に言い聞かせ、厳しくチェックしていた。

また、吉田は食へのこだわりが非常に強く、ホテル内全てのレストランのメニューは四季折々で確認し、新しいメニューのアイデアも考案した。食材に関しても細かく確認しており、当時はホテルオークラや山の上ホテルしか使用していない最高級のキャビア「ペルーガ」を仕入れていた。レストランの料理は全てシェフたちの手作りであることを徹底させ、手間を省いたり、コストを惜しむようなことをすれば、吉田はシェフを叱っていた。仕入れ値が高くても、レストラン客が喜ぶような食材であれば許されていたという。そのためシェフは他のホテルに比べ一人前になるのが早く、料理の質が磨かれていった。また吉田は料理の知識や教養が深く、フレンチやイタリアン、中華、和食のレストランへ足を運び、自ら料理の研究をしていた。雑誌などで気になるレストランがあればシェフに勉強して来るように指示を出すことや、目利きのために、築地市

場の魚海岸で自由に仕入れをさせるなど、シェフに負けないほどの追求心があった。

給料に関して、当時すでに銀行振り込みが主流であったが、吉田は、一人ずつ手渡しで渡していたという。森裕治は、「このお金は山の上ホテルで一生懸命働いてもらってきたんだということを、しっかりと家族に感じてほしかったからだと思うのです」<sup>22</sup>と述べている。

そのような吉田であったが、昭和 59 年、S 字結腸癌が発見される。1 度目の手術を済ませるが、肝臓に転移していたので、2 つ目の癌も除去して、手術は成功に終わった。しかし、3 年後検査を受けると、腰に転移していることが判明した。患部が深く、手術が不可能であった。吉田は徐々に衰弱し、見舞いに来ていた従業員の竹若や孫の森と話しがあまり出来なくなり、死期が近づいたころ、竹若に、「竹若、いまから言うことをよく聞け。おれにもしものことがあっても、三年半は絶対に大丈夫だ。あとは、おれが教えたとおりにやっていけばいいぞ」と話し、森には、「ばあさんとホテルを頼んだぞ」との言葉を残し、平成 3 年 9 月 14 日に息を引き取った。その後、森が吉田の遺志を引き継ぎ、吉田の妻・令子とともに山の上ホテルを支えたのである。

## 5. 2. 吉田令子

吉田俊男を語る上で避けて通れないのが、妻・令子の活躍である。吉田俊男にとっても、山の上ホテルにとっても大きな存在だった令子は、主にホテルの外交基礎を築き上げた。ウィーン少年合唱団が初めて来日した際、山の上ホテルに宿泊してもらうため、令子は NHK の会長に連絡を取り招き入れた。また、客室の基礎を作り上げたのも令子である。アンティーク家具に興味があり、壁紙や絨毯、カーテンなどの調度品は全て令子が決めていた。それは建築会社の社員が参考にしたと願ひ出るほどであり、見学に訪れることもしばしばあったという。

令子は従業員の身だしなみや言葉遣いを厳しく指導していた。気になった女性従業員に対して、「口紅くらいは塗った方がいい」と言ってお小遣いを渡していた。従業員たちも気を使ってくれる令子が大変信頼していた。従業員は、「吉田社長にこっぴどく叱られると、たまたず従業員は社長室を飛び出すのですが、叱られた従業員と一緒に令子さんが必ず飛び出してきて、いつも慰めてくれました。それがあったから山の上ホテルで続けてこられたのです」、「お客さまに対しても、従業員に対しても、とても上品な言葉遣いをされる、とても気の利いた、小柄ながら優雅な女性だった」と述べている<sup>23</sup>。

令子は誰に対しても上品で温厚で、吉田俊男が従業員を叱ったときは慰め、逆に令子が叱ったときは吉田俊男が励ますなど両輪の役割を担っていた。

駿河台の界限には、明治大学、中央大学、日本大学などの大学が数多く存在する。そのため 2 月、3 月には受験生が山の上ホテルを利用し、一般客が予約を取れないことがあった。吉田俊男はあまりの受験生の人数に「ここは受験生の宿じゃないぞ」と従業員や令子を叱ったが、令子は受験生にどういったおもてなしができるのかと考え、宴会場を 1 つ潰して、受験用の朝食と夕食を出していたという。令子もまた、令子なりの仕方で山の上ホテルを愛していたのである。

あるとき、明治大学が山の上ホテルの隣にリバティーホテルを建設するという話を聞いた令子

は、「高層の建物を建てられると、山の上ホテルの景観が損なわれてしまい、ホテルが見えなくなってしまう。10階分ほど低くしてください。それでないと私は困ってしまいます」と、明治大学の理事長に直談判し、受け入れられたという。

令子は俊男の生前から死後に至るまで、山の上ホテルを愛し支えてきたのであった。

### 5. 3. 関口達夫

山の上ホテルの元総支配人、関口達夫は、入社当時に「パブリック・バス」の清掃係を務めていた。関口は便器に手を入れて洗うのが嫌でたまらなかった。そのため、ホテルに出勤しないことがあり、吉田令子から電話で説得されることもあった。その後、羽田空港での宿泊客の勧誘に勤め始めるが、当時は中々宿泊客が見つからず、吉田俊男から叱られていたという。しかし、後に関口は「怒る人がいたことをしあわせに思う」<sup>24</sup>と語ってる。

### 5. 4. 秋山祐介

山の上ホテルについて、「安心して眠っていただけること、美味しい食事を召し上がっていただけることが、ホテルの使命です。あえて「時代とともに変わらないホテル」とでも申し上げておきましょう」<sup>25</sup>と述べる秋山祐介は、山口瞳に「秋山小兵衛殿」と言われるような洒落な人物であった。吉田俊男に叱られても、そんなことはものもしない楽道家であったが、ユーモアのセンスが豊かで礼儀正しいことから、宿泊客の評判が良かったという。

秋山はフロントのスタッフを担当しており、仕事内容に対して、「それだけに僕たちフロントを預る立場としては、チェックインの時のお客様の表情やチェックアウトの時の感じなどに人一倍気を使うことになるのです。——果して、このお客様は満足されたのかどうか、何かご不満の点はなかったのだろうかなど、口でおたずねするのは、押しつけがましいので、それとない感じでうちへの評価を知ろうとする——この努力を八年間続けたわけです」<sup>26</sup>と述べている。

秋山は、吉田の教えを肝に銘じており、「うちのホテルが最大の課題としている——心に沁みる見えないサービス心ということが、やはり一番大切だということをつくづくと感じた次第です」<sup>27</sup>と、吉田のサービス精神を理解し、確かに受け継いでいる。

### 5. 5. 橋本保雄

ホテルオークラの元副社長である橋本保雄は、山の上ホテル出身のホテル従業員であった。昭和30年に入社し、しばらく山の上ホテルに勤務していた。入社して5年後にホテルオークラの創業に協力しないかと話を持ち掛けられ、本格的な国際的ホテルの創業に興味を持ち、意を決して吉田俊男に相談する。しかしながら、「だめだ」の一言で断られ、山の上ホテルに留まることになるが、ホテルオークラの創業計画には参加することになった。

ある日、吉田から「ご苦労さんでした」と言葉を掛けられ、大量のお札が入った一封の紙包みを渡される。当時は退職金の規定などなかった。橋本は後に、「とにかく社長は多くを語らない。

今までなぜ、私を引き止めたのか。しかし、私はこの短い言葉と紙包みによって、社長の真情をすべて理解したような気がした。この一年で、今までの何年にもまさる、人間的な勉強をさせてもらったからだ」<sup>28</sup>と語っている。

#### 5. 6. 石本恭子

山の上ホテル改装前、本館には手動式のエレベーターがあった。エレベーターガールを担当していたのが石本恭子であり、聖心女子大学出身、父親が九州大学名誉教授という名門家系で育った。言葉遣いが非常に上品で、立ち居振る舞いも良く、宿泊客からの評価は高いものだったという。万が一、他の宿泊客に迷惑をかける宿泊客を見かけたなら、厳しく注意した。しかし、厳しくされた宿泊客はたじろいでしまうことはあっても、その後ホテルに来なくなることはなかったという。吉田は、石本の仕事ぶりを認めており、別館の4階に和室の部屋を与え、住まわせるほどであった。宿泊客の中には、「彼女のような品のいい女性がエレベーターを動かしているホテルは、世界中どこにもない」<sup>29</sup>と評価する者がおり、立ち居振る舞いの良いと評判のある吉田の夫人と間違える宿泊客もいた。また、石本は宿泊客のことを細かく記憶しており、フロントの従業員に対し宿泊客の特徴を教えていた。石本が病気で亡くなった後、古くから山の上ホテルの利用していた宿泊客は、「本当に気品のある女性だった」、「彼女と話をするのが楽しみだった」と、石本に対し、非常に感謝していたという。

#### 5. 7. 森裕治

森裕治は、山の上ホテル元代表取締役社長であり、『山の上ホテルの流儀』の著者である。吉田俊男の孫にあたるため、ホテル業に就くまで吉田に育てられた。森は成城大学経済学科に通っていた時代、ホテル業に興味を持っており、卒業論文では「ホテル進化論」をテーマとしたという。

ホテルの勉強の為、アメリカの語学学校への留学を吉田に相談するが断られてしまう。そのため、日本で就職活動を行い、バブル景気の中で内定をいくつももらったのだが、吉田に「そんな会社に入って何になる」と言われ、全て取り消され、吉田が薦めた旭硝子に勤める。初めは旭硝子に入社することを全く考えていなかった森だが、勤めている間に仕事にやりがいを感じ、東京から福岡に赴任しても仕事を続けた。

一方、森が福岡に赴任していたころ、吉田は体調を崩していた。吉田から、大事な話があると呼びかけられるが、反発心があった為しばらく東京へ帰らなかった。無視をしていると、飛行機の航空券が森のもとに送られ、渋々ではあるが吉田に会うことを決意する。その後、吉田にホテルをやらぬかと言われるが、アメリカ留学を断られたこともあり、森は耳を傾けなかった。しかし森にホテル業を継いでほしいという思いが強かった吉田は、亡くなる直前に涙を流しながら「ホテルを頼んだぞ」と言い残した。吉田の想いを受け取った森は、反発することを止め、吉田の遺志を引き継ぐことを決心したのである。

旭硝子を退職した森は、東京の芝パークホテルで3年間修業し、ホテル全般の仕事を学ぶ。そ

して、令子や吉田と働いた従業員たちに吉田の遺志や考え方を教えてもらい、山の上ホテルへ入社した。その後、山の上ホテルの従業員となった森は、コンサルティングを入れ、意識改革を行う。吉田が社長時代の山の上ホテルとは形は異なるが、確かにその遺志を引き継ぎ、山の上ホテルを支えたのである。

森は山の上ホテルを「ホテルであって、ホテルではないホテル」と表現し、「これはどのようなことか」といって、各料理の専門店があり、その上に宿泊施設があり、その宿泊施設もただ泊ればいいのではなく、下の専門店で受けたサービス、またはそれ以上のサービスが受けられる寝床がある、というイメージで捉えているからです」と述べている。また、「吉田俊男・令子が残したもの自分が「預かっている」と考え、「この二人が残したものをどうしていくか」ということしか考えていない」といふ。森の次の言葉は、森ひとりではなく、従業員全員の気持ちを代弁していたのかも知れない<sup>30</sup>。

吉田俊男・令子にこのホテルを託されたことにより、苦勞もたくさんありますが、何が自分を奮い立たせているかを考えると、吉田俊男・令子が残したこの山の上ホテルという「存在」なのです。そこに集約される中で、このホテルには吉田俊男と令子が生きていて、それに自分は甘えることなく、踏み越えてはいけなないと考えています。

私としては、守るべきものを守りながらも新しいものを作っていき、新しいことを発信していく、勝負に出るところは出る、ということが自分に課せられた仕事だと思っています。

作家の証言にもあった、山の上ホテルから感じる住宅らしさは、吉田や従業員による徹底したサービスから生まれている。宿泊客に合わせた料理の提供や、宿泊客の顔、名前、特徴を覚えて的確なサービスを行うなど、宿泊客との距離感を意識した接客方針は作家に安心感や快適さを与えたのである。作家の証言や従業員の証言から、吉田の宿泊客への熱意を感じ取ることが出来る。山の上ホテルの広告のコピーにて、吉田は「良いものが好きとは限らない 合うから良くなるのかも知れません このホテルは貴方に合うでしょうか」と述べている。単純にサービスや設備を向上させるのではなく、宿泊客の要望を受け、宿泊客を中心とした吉田の心は、名声や利益などではなく、山の上ホテルを利用する「人」のためにあったのである。吉田のこういった考え方が、宿泊客の安心感に繋がり、快適な空間を創り上げる一つの要素となった。

## 6. おわりに

山の上ホテルは、日本人の生活を文化的でよりよきもの（「新興生活」）に改善しようとした佐藤慶太郎によって、その新興生活の指導に当たる婦人を養成するための施設、佐藤新興生活館としてヴォーリズによって設計された。ヴォーリズは、佐藤同様、日本人の生活をキリスト教的・文化的生活に改善し、それに相応しい住宅や建物を設計していた。ヴォーリズは、住宅において、家族の健康を大切に、女性と子どもを大切に、婦人教育の大切さも唱えていた。そして何よりヴォーリズは、全ての建築において、建物の内部空間の意味と本質を徹底的に考え抜き、そ

れにもっとも相応しい内部空間を創造していた。そのヴォーリズが、志を同じくする佐藤慶太郎の依頼をうけて設計したのである。その建物の内部空間は、佐藤とヴォーリズの思想が共鳴して生み出された意味と本質を持っていた。それを敏感に感じ取り、自らの理想と共鳴させるかたちで、ホテルとして創業を開始したのが吉田俊男であった。

佐藤慶太郎とヴォーリズと吉田俊男。もちろん三人の思想が完全に一致していた訳ではない。しかしながら三人とも、人間を信じ、人間を愛し、他人への細やかな心遣いを持っていた。そして、他人のために全てを捧げるという精神を共有していた。そして吉田は、それを徹底的に従業員たちに伝え、従業員たちもまたそれを誇りとして受け継いだのである。

山の上ホテルの内部空間は、佐藤の志によって生み出され、ヴォーリズの設計によって実現し、吉田俊男と令子、従業員たちによって受け継がれていった精神がひとつになって創造され、育てられたものだったのである。

そのような精神、あるいは心といったものは、目に見えないし、触ることもできない。だが感じることはできる。とりわけ豊かな感性をもった作家たちには、それがありありと感じられたのであろう。「何処が気ニ入ツカト云ハレルト困ルケレド」(檀一雄)、「清楚な雰囲気になによりも好ましい」(石坂洋次郎)、「まことに居心地のよい」(堀内敬三)、「不思議に落ち着くのは空気に調和があるからであらう」(尾崎士郎)、「山の上ホテルからは私も「誠意と真実」をいただいた」(常盤新平)、「何度も二泊か三泊するうちに、いいホテルだとしみじみ感じるようになる」(同)、「「気持ち安らぐ」もしくは「自分の家に帰ってきたようだ」(山口瞳)、「山の上ホテルが私に与えてくれるのも「安心感」である」(同)、「このホテルに入ると、ホッと安心する」(鍋井克之)という表現の仕方がそれを物語っている。

そしてこれは、ヴォーリズ建築に共通して出てくる感想と同じものである。ヴォーリズ建築の内部空間に対して、「なんとなく心地よい」とか「なんとなく懐かしい」などという感想をよく耳にする。その「なんとなく」の意味を解明するために、その第一歩として、本稿では内部空間の証言が多い山の上ホテルを取り上げ、その証言と、山の上ホテルに関わった人間について考察してきた。あるいはずいぶん回りくどいやり方だと思われたかも知れないが、定量評価できない内部空間の意味本質を解明する一つの試みだと理解していただければ幸いである。

## 注

- 1 「ヴォーリズ建築：山の上ホテル（1）—作家の証言が意味するもの—」, 雲雀野 41, 豊橋技術科学大学, 2019
- 2 「新日本の住宅様式」, 住宅 6, 1916
- 3 『樂しき住家』, 警醒社, 1919
- 4 「大正四年から大正十一年までの博覧会・展覧会から見た住宅改良の動向について」, 風俗 23, 1984
- 5 『吾家の設計』, 文化生活研究会, 1923
- 6 「吾家の生活 二十一 母の感化」(湖畔の声(2月号), 1930)。長らく書籍化されなかったが、近年、岡田学によって現代語訳され、一冊にまとめられた(岡田学編『吾家の生活』, 遵義堂, 2015)
- 7 山形政昭『ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築 ミッション建築の精華』(創元社, 2018)など。

- 8 「いま、保存の季節はめぐる―＜再生＞も＜設計＞と考える建築家たち」、新建築 55, 1980
- 9 「山の上ホテル本館改修〔設計・アトリエ・アイ〕」、新建築 55 以下阿井の引用は全て同じ。
- 10 「『山の上ホテル』の蘇生（特集 生き続ける文化遺産）」、建築 / 保全 20 (1), 14-23, 健康保全センター, 1998
- 11 引用は『山の上ホテル物語』（常盤新平, 白水社, 2007）による。
- 12 同
- 13 同
- 14 同
- 15 『ヴォーリズさんのウサギとカメラ』, 山崎富美子, 上ヶ原文庫, 2008. 7
- 16 『山の上ホテルの流儀』, 河出書房新社, 2011. 2
- 17 注 11 に同じ
- 18 同
- 19 『行きつけの店』, 山口瞳, ティビーエス・ブリタニカ, 1993. 4
- 20 同
- 21 『年金老人奮戦日記（男性自身シリーズ）』, 山口瞳, 新潮社, 1994. 12
- 22 注 16 に同じ
- 23 注 16 に同じ
- 24 注 11 に同じ
- 25 注 11 に同じ
- 26 注 11 に同じ
- 27 注 11 に同じ
- 28 注 11 に同じ
- 29 注 16 に同じ
- 30 注 11 に同じ

※引用の旧字は新字に改めた

※本稿は、特に明記していない箇所も『山の上ホテル物語』『山の上ホテルの流儀』の二書に負うところが大きい。記して諸意を表する。

## 前稿補遺 (2 作家たちの証言)

### 田辺聖子 (1928 ~ 2019) 作家

このあいだ、東京は駿河台の山の上ホテルに罐づめになって仕事をしていた。このホテル、頃合いの大きさで、サービスもきめこまやかで、従業員の人々の感じのよいことは、ホテルの中の超一流といってもいい。私は設備ばかり豪華で、従業員の教育のわるいホテルは嫌いだが、しかしホテルが大規模になるとそれは避けられぬ宿命かもしれない。一夜泊りなら、豪華な気分や格式を楽しむホテルもいいが、罐づけになって仕事をしているときは、小規模で、家族的で、心くばりのやさしいホテルが好ましい。ここは机もスタンドも貸してもらえるし、ルームサービスは深夜二時までである。(『ラーメン煮えたもご存じない』新潮社、1977)